

防災歳時記（43）

—お節句に来た大津波—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

三陸地震津波

3月3日は桃の節句、ひなまつりである。女の節句として、ひな人形や白酒・ひしもち・桃の花を飾る。小さな飾りの一つ一つに女兒の幸せを願う心が込められる。

昔、桃の節句に、三陸沿岸を襲った大津波がある。

1933(昭和8)年3月3日午前2時31分ごろ、M8ユの巨大地震が日本海溝付近で発生した。震害は少なかったが、数百mにも及ぶ異常な引き潮の後、大津波が三陸沿岸を襲った。死者・行方不明者3,064人、家屋の流失4,034、倒壊1,817、浸水4,018棟を数えた。波高は、岩手県三陸町の綾里湾で28.7mにも達した。この津波を「三陸地震津波」と呼ぶ。

この津波には悲しい話がたくさんある。

青森県三沢地方では、地震で目を覚ました一家が、背後の高台にいったん避難した。

早春の3月3日の真夜中といえば、まだ寒い。子どもは寒さと眠気のため、家に早く帰りたいと泣き出した。しかたなく、家に戻ったとたんに津波が来て、一家10人は波にのまれてしまった。

また、親孝行の息子が、母親を背負って避難している途中、遅れたため津波にのまれて2人とも亡くなった。

桃の日の母に津波の記憶あり

(小原啄葉)

大津波から半世紀以上もたった今、日本農業新聞で見た俳句である。三陸の海沿いの村で生まれた母の、幼いころの桃の日の悲しい記憶を詠んでいる。女の子の楽しい桃の節句の思い出が、突然襲った津波のために悲惨な記憶として長くあとあとまで尾を引いた。3月3日を迎えるたびに母は、犠



写真1 宮城県気仙沼市付近の海岸と防潮堤
(旧明戸集落付近)

性になった幼い友を思い出し、もの悲しい表情を隠そうとしない。

明治三陸地震津波

5月5日は端午の節句。菖蒲(しょうぶ)の節句ともいう。男の節句として、武者人形を飾り、こいのぼりを立て、かしわもちを食べて男児の立身出世を願う。昔、端午の節句に、三陸沿岸を襲った大津波がある。

1896(明治29)年6月15日午後7時30分ごろ、三陸沿岸で震度2~3の地震があり、震害はなかった。震源は三陸沖約500kmでM8.5。

この日は、旧暦5月5日の端午の節句にあたり、三陸沿岸の家々ではもちをつき、しょうぶ湯に入って祝い膳(ぜん)を囲んだ。加えて日清戦争の戦勝を祝う式典もあって、ごちそうの重なった夕食だった。

まさかそのさなかに大津波が襲うとは、だれひとり思っただけではなかった。午後8時すぎ、突然、ごう音とともに大津波が襲いかかってきた。まさに「呪(のろい)の節句」になってしまった。

初めの弱い地震のあと、40分ほどたったころから大津波が打ち寄せ、津波の高さは15~20m、岩手県綾里湾では38.2mにも達した。10階建てのビルの高さにもほぼ匹敵する大波だ。

津波は一瞬のうちに家屋を倒し、人々をのみ込み、暗闇の中でどう(怒濤)がごう音を発しながら荒れ狂った。救いを求めて号泣する声を聞けども、濁浪の中での救助は至難のわざだった。大木の枝にかかって

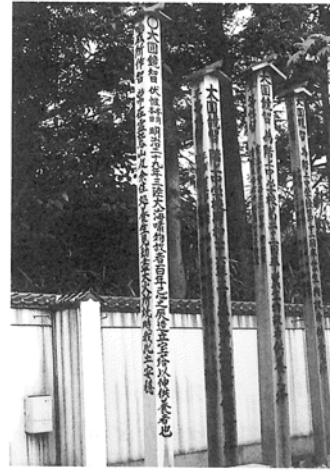


写真2 明治三陸地震津波の百年忌の
供養卒塔婆(気仙沼市の地福禅寺)

腹を裂かれた婦人の悲惨の姿があった。

津波を敵艦の襲来と勘違いし、波に目がけて突貫し、山なすどとうに巻き込まれて死んだ兵士もいた。

この大津波による死者は約22,000人、家屋の流失全半壊は1万棟以上。日本最大の津波災害で、「明治三陸地震津波」と呼ぶ。

地震の揺れをあまり感じないのにもかかわらず、津波を起こす地震を特に津波地震と言う。海底の断層の動きがゆっくり大きく動いたためと考えられ、「ぬるぬる地震」とも呼ぶ。本例はその代表的なもの。

以上の2例は次のような教訓を残した。

■繰り返し襲ってくる

津波は繰り返し襲ってくる。津波警報や注意報が発表されたら、解除されるまで、海岸には近づかないようにする。

■前触れもなく襲ってくる

津波は突然襲ってくることもある。必ずしも引き潮から始まるものではない。